

小野ゼミ回想録

第19期 長谷川 鈴音

私は、小野ゼミの面接で、小野先生と初めて話した時のことを、昨日のこのように思い出せる。先輩達からの怒涛の質問攻めの後、先生は、「長谷川さんは、普段、泣いたり、怒ったり、笑ったりすることある？」と、私に尋ねた。緊張のあまり「そうだと思います...。」と最悪の回答を導き出した私に、先生は、「小野ゼミに入ったら、たくさん泣いたり、怒ったり、笑ったりすると思うよ。」と言ったのであった。

今思えば、小野ゼミに入る前までの私は、あまり喜怒哀楽を表現するような人間ではなかったように思う。特に、大学生になってからの私は、できる限り全ての人と円満な関係を築くことを信条として、大学生活を過ごしていた。そのため、泣いたりすることはなかったし、怒ることももちろんなかった。そもそも、コロナの影響で引きこもっていたこともあり、親しい友人らと会うこともあまりなかったし、大体の人に対しては、まあニコニコしていればうまくいかないことはないだろうという考えをもっていた。

ところが、小野ゼミでは、それまでの私の考えは全く通用しなかった。次々と目の前に迫る課題を対処するに際して、みんなにニコニコしているだけではうまくいかなかったし、泣いたり、怒ったりすることがたくさんあった。みんなに振り分けた三田論の作業を1人でやっていた時や、卒論で文章がうまく書けなかった時には、自分の不甲斐なさやもどかしさに涙を流すことがあった。三田論や夏のケースの作成がなかなかうまく進まなかった時、あまりの悔しさや言い表せない感情のために、zoomのカメラを消して、泣いたこともあった。時には、ゼミの活動がうまく回らないことに対して、みんなに憤りを見せることもあった。人前で怒りを見せたのは、私の人生で初めての経験であったと思う。

しかし、泣いたり怒ったりしたこと以上に、小野ゼミでは、笑ったことがたくさんあった。ビジコンの書類通過の電話がきた時、閉店間際のガストで三田論の分析が成功した時、相談会で夏ケースの出来が良いと先生にお褒めいただいた時等々、何かをやり遂げた時や成果が出た時には、とても嬉しかった。そのような特別な時でなくても、同期と一緒にいる時間は楽しかった。教室で三田論の作業をしていた時、日吉のマックでケースを作っていた時、日吉のファミレスと一緒に卒論をしていた時、ゼミの帰り道に電車の中で話していた時、エアビや旅行先で一晩中話していた時等々、楽しかった記憶を挙げるとキリがない。

このように、これまでの私の短い人生の中で、小野ゼミでの時間は、私の感情の全てがぎゅっと詰まったとても濃い時間であった。小野先生の予言(?)通り、嬉しい思い出や楽しい思い出だけではなく、苦い思い出もたくさんあるが、それら全てが、私にとって大切な思い出である。そう断言できるのは、一緒に同じ時間や感情を共有した同期のおかげである。みんなありがとう。そして、全ての活動を近くで見守り、ご指導いただいた、大学院生や18期の先輩方、本当にありがとうございました。最後に、優しく、時に厳しく、ずっと私たちを見捨てずにご指導いただいた小野先生、本当にありがとうございました。

小野ゼミでの全ての経験をもって、社会人になれることをとても嬉しく思います。小野ゼミの皆さんに、そして、同期のみんなに、社会人としての経験を自信をもって話せるといいな(・ω・`)